

氏名	柴 垣 勇 夫
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文化科学
学位授与番号	博甲第 1730 号
学位授与の日付	平成 10 年 3 月 25 日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	東海地域における古代中世窯業生産史の研究
論文審査委員	教授 稲田 孝司 教授 狩野 久 教授 齊藤 孝 助教授 久野 修義 三重大学人文学部教授 八賀 晋

学位論文内容の要旨

本論文は、東海地域における古墳時代から中世までの窯業生産の歴史を体系的に叙述したもので、A4版ワープロ打ちで288頁におよぶ。内容は既発表論文を基本とし、それらの文章の補訂を行うとともに、新たに書きおこした章・節を加えて全体を統一したものである。

序章 東海地域における窯業生産の成立と展開

1954年から始まった愛知用水関係の事前調査で猿投窯跡群・尾北窯跡群・知多窯跡群・瀬戸窯跡群等の発掘が行われた経過と、その後の研究展開の経緯をたどるとともに、東海地域における窯業生産発展に関する問題の要点を概観し、本論への導入とした。

第1章 古代窯業生産の開始と地域窯の形成

5世紀代に東海地域で須恵器生産が始まった経過を明らかにし、須恵器と併せて焼成された須恵質円筒埴輪の特色、すなわち尾張型埴輪・伊勢型淡輪系埴輪・遠江型淡輪系埴輪のあり方を分析することにより、須恵器製作が埴輪製作工人と密接に関係して発展したこと、尾張地方と伊勢・三河・遠江地方との間に首長支配の力に差異があったことを述べた。

第2章 古墳時代の須恵器生産

6世紀代の尾張地方では、東山窯・下原窯・卓ヶ洞窯の3者において連続して須恵器生産が行われたが、これらは大型前方後円墳を築いた3つの首長グループがその生産を支配していたもので、全長約150mの断夫山古墳被葬者を頂点とする政治支配体制が尾張地方全体におよんでいた。他方、遠江・伊勢地方では小規模で単発的な生産にとどまり、こうした地域格差は7世紀前半まで続いた。

この時期には装飾付須恵器と特殊須恵器の製作が盛行した。これらの器種区分を明確にするとともに、全国的な事例を集成して分布に地域性のあることを明らかにし、鳥鈕蓋付台付壺の分布など、東海地方の地域的特色を把握した。

第3章 奈良時代の須恵器生産

尾張地方猿投窯の須恵器生産窯の分布の特徴や規格化された製品の特徴をとりあげ、奈

良時代においては、古墳時代の個別的な地域供給とは異なり、尾張国という単位で須恵器生産が行われたことを推論した。

名古屋市戸笠1号窯と同市正木町遺跡で「黒見田」、奈良県飛鳥京石神遺跡で「黒見太」とそれぞれ刻書した須恵器が出土した。これらは尾張で生産された須恵器が都へ貢納されたことを示し、7世紀後半には須恵器が国衙機構の関与のもとに組織的に生産されたことを物語る。

奈良時代の尾張では尾北窯と猿投窯が須恵器生産の主体であり、器種の分化と規格化が進んだ。従来、尾北窯が官営工房で猿投窯が在地消費用の生産であったという意見や官営工房としての性格が8世紀中葉に尾北窯から猿投窯に移るといった意見などがあったが、著者は尾北窯と猿投窯はともに当初から官窯的性格をもち、郡の支配様相の違いにすぎないと主張する。しかし8世紀後半に猿投窯における須恵器生産に飛躍があることは認め、同じ時期に平城宮で和泉産須恵器が減少し尾張産が増加する現象と関連があるとみた。

第4章 平安時代の須恵器・瓷器生産

猿投窯では9世紀前半に白色素地の灰釉陶器の生産が始まり、まもなく緑釉陶器の生産も開始した。これらはいずれも中国越州窯の磁器を模倣したもので、中国陶磁に次ぐ高級陶器として平安京をはじめ各地へ運ばれ、猿投窯の全盛期をあらわした。とりわけ鳥鈕蓋付平瓶と多口瓶は猿投窯を特徴づける器形であった。10世紀後半になると、灰釉の器種の減少、椀・皿の量産化、花文の簡略化が進み、窯の構造も分焰柱の固定されたものに統一される。全体として、一般向けの製品供給をめざした窯業形態が進んだ時期ととらえる。

「^羨灰^土杯」と書かれた灰釉をとりあげ、記された杯の器名と実際の椀形態との違いに着目し、平安時代中期前半頃における律令格式の再編を推論した。

第5章 東海地域における中世窯の成立

11世紀末から12世紀末までの1世紀間が中世窯への転換の時期であり、陶器生産の中心は灰釉陶器から山茶碗へと移った。山茶碗窯では瓦が併焼され、それらが京都の寺院造営に用いられた。従来京都へ運ばれた瓦は知多産とみられていたが、そこに猿投窯産が含まれることを論証し、尾張産瓦の京への供給には国衙機構を媒介として院政に結びついた尾張の受領国司層の介在があったものと考えた。12世紀末、尾張の瓦の文様意匠は多彩になり、鎌倉寺院にも採用されるが、その背後には熱田神宮司職と源氏との姻戚関係があることを指摘した。

12世紀には、猿投窯の山茶碗工人の移動により知多半島常滑窯・渥美半島中世窯が成立し、猿投窯の外延部では、12世紀末に壺・瓶に新しい器形や灰釉をかける器種が登場し、中世瀬戸窯が成立した。

第6章 中世の窯業生産と流通

中世瀬戸窯については、南宋白磁の影響を受けて独自に成立したとの説もあるが、玉縁状口縁椀などの発展過程を詳論し、11世紀中葉から12世紀の灰釉・山茶碗にすでに白磁の影響が現れていることを確認して、猿投窯山茶碗工人の移動による成立を強調した。

瀬戸窯では、13世紀末から14世紀にかけて新たに中国福建省建窯産の天目茶碗の模倣が始まる。瀬戸窯からの工人の移動により、15世紀末と16世紀後半以降に静岡県志戸呂窯で天目茶碗の生産が行われた経過をたどり、その生産の普及の様相を明らかにした。

第7章 東海地域における古代・中世窯の特質

唐三彩と奈良三彩、越州窯青磁と灰釉・緑釉、南宋白磁と灰釉・山茶碗などの関係を整理するとともに、13・14世紀の瀬戸窯で高麗青磁の模倣が行われたことも指摘し、日本の窯業生産の歴史展開を理解するには、東アジア全体を視野に入れて考えることが不可欠であることを強調した。

本章最終節において、古墳時代から古代・中世までの東海地域窯業生産の歴史を、その管掌者の変化を軸にして総括した。

論文審査結果の要旨

学位審査会は、1998年2月5日、学内審査委員4名・招聘審査委員1名によって行った。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、東海地域における古墳時代から中世までの窯業生産の歴史を体系化したもので、須恵器生産の開始から奈良・平安期の陶器生産を経て瀬戸・常滑等の中世窯にいたる通史的展開を、愛知県猿投窯をはじめとする膨大な発掘資料を駆使しつつ、網羅的かつ具体的に叙述したものとして、当該研究の発展に大きく寄与しうる内容と評価できる。

本研究では、陶器類・瓦当文様の型式学的分析や窯跡の構造と地域分布の特色の把握などを行うことにより、東海地域における各窯業生産地間の相互関係を明らかにするとともに、生産の場である東海地域と畿内・鎌倉等の消費地との関係を追究し、それらの間に介在した窯業生産管掌者と国家機構のあり方や政治過程にも言及した。さらに大陸における窯業生産との関係を視野に入れるなど、東海地域という一地域の窯業生産をより大きな空間に位置づけ、その文化的・社会的特色を多様な観点から把握したものと判断できる。

論文の構成については、歴史段階を追った章の配列と固有の検討課題を明確にした節の区分により、一貫した流れと多彩な論点の両面をあわせもつこととなった。先行研究については諸説を丁寧に紹介し、自説を展開したのちも、将来における新資料の増加を考慮して一面的な断定をさけるなど、研究に対する慎重な姿勢が伺われる。文章は平易で、挿図も明瞭である。

以上の積極的な評価が審査の基本であったが、次のような問題点の指摘もあった。

東海地域で窯業生産が発展した自然的な条件（原材料となる粘土の質や窯の設置の地質・地形的条件など）を検討する必要があること。窯業生産の管掌者については、文献史研究による一般常識での解釈に流れる傾向があるが、遺跡・遺物資料から独自の性格づけがあってもよいのではないか。窯業生産の歴史を考えるには、管掌者の関与とともに、それを使用する側とくに民衆の欲求のあり方も考慮すべき点があること。瓦陶兼業窯がとりあげられたが、瓦生産のみの窯業についても概観しておく必要があること。

その他、内容の細部や用語の用い方等に関しても各審査委員の間で種々議論がなされたが、上記問題点を含め、指摘された点の多くは本論文の欠陥というより今後のさらなる研究発展への期待といった趣旨のものであり、窯跡発掘成果などの基礎資料がまだ十分に公表されていない条件のもとでここまで体系化するに至った研究成果を大きく損なうものではないことを改めて確認した。

審査委員会は、以上により、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。